

《第 481 回（2021 年 4 月 8 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：7 人 文書参加：1 人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『キャラメル色のわたし』 シャロン・M.ドレイパー／作，横山 和江／訳 鈴木出版

今月の課題図書は、現代のアメリカを舞台にした物語です。主人公は、黒人の父と白人の母の間に生まれた 11 歳の女の子、イザベラ。彼女自身は、自分のことを黒人と思っていて、そのことに誇りを持っています。両親が離婚したあとは、「共同親権」の制度により、一週間ごとに父と母の家を行き来しながら生活していますが、どちらも自分の家と思えず、生活が二つに切り分けられたように感じています。

そんな彼女の周りでは、自身のアイデンティティと向き合わざるを得ないような出来事が次々と発生します。「黒人は肌の色で偏見を持たれるため、身なりには気を付けたほうが良い」という父からのアドバイスや、黒人のクラスメイトへ向けられた嫌がらせ、母と二人で歩いているときの周囲の不思議そうな目、黒人の友達同士で遊びに行ったモールで警備員から受けた不条理な退去通告。そして、気になる男の子から言われた、ほめているつもりの傷つく一言。ラストには、近年社会を揺るがせている、白人警官による黒人男性への暴力事件を彷彿とさせる事件が起こります。テレビや新聞のニュースだけでは実感できない、社会の中で確かにある不平等で差別的な目が、普通の女の子の目線から臨場感を持って伝えられている作品です。

次に、読書会に参加された方々の感想を紹介します。

●ポップな表紙なので、軽い感じの本かなと思ったけど、深刻な問題を取り扱っていた。日本にいと、人種差別を自分に即した問題だと感じにくい。ニュースを聞いて知識としてあったとしても、物語として読むと理解度が違う。11 歳の女の子の目線なので、余計に身に迫るものがある。

●イザベラたちの学校の先生の指導がすごい。根本的に、教育が一番大事だと気付かされた。学校へ提出する書類に、人種を書く欄があるということにも驚いた。生活の中でも日常茶飯事に、人種を意識させられる場面がある。今後イザベラが、自分の置かれた立場にどう声をあげていくかが気になる。

●児童文学の良さが分かった。6 年生の孫にプレゼントしようと思う。ジョン（イザベラの母の再婚相手）が、自分の両親が人種差別主義者だったことをイザベラに告白するシーンが印象的だった。イザベラにとってピアノが心の支えになっていることが分かる。今のこどもにも、そういったものを見つけてほしい。

●一週間ごとに両親の家を行き来する生活に、読み手も心もとない気持ちになった。人種差別の問題や、両親の離婚、共同親権など、いろんなトピックが一冊に詰まっている。問題に対して、自分の認識をしっかりと持たないといけないと感じた。最後のシーンは衝撃。実際に日常として起こっているということにショックを受けた。

●共同親権の制度は、果たしてこどものためなのか？イザベラが、自分の居場所が分からなくなっていることに切なくなる。ピアノのシーンは、白鍵と黒鍵を、白人と黒人になぞらえているのかな。友達とショッピングするシーンでは、ラッシュのカラフルなバスボムが、楽しい時間の象徴として描かれていた。

●意識をひっくり返すような物語だった。アメリカの学校のあり方や、授業の内容に興味があった。日本の学校で、作中の事件と同じようなことが起こったらどうなるだろう？火を大きくしたくないという発想になるのでは？少なくとも警察は来ないだろう。差別にきちんと向き合わないといけないという社会になっている。

●差別への意識は、公民権運動で良くなったと考えていたが、人の心の中はまだまだ。アメリカでは黒人という理由で命まで奪われる事件が相次いでいる。人の心を変えるのは地道な積み重ねだと信じたい。人種差別は他所ごとではなく、何気なく口にしたことが差別的発言になっているかも。自分のことに目を向けなくては。

次回 5 月 13 日（木）10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ウィズ・ユー』 濱野 京子／作 くもん出版